



池亀 昂
胃食道外科医師

目指す「日本臨床腫瘍研究グループ（JCOG）」の胃がん領域で参加施設に加わった。ロボットの有効性に関する

医療最前線

ロボットと未来

県立中央病院から

〈265〉

手術支援ロボット「ダヴィンチ」は国内で急速に広がり始めているものの、その歴史は浅い。山梨県立中央病院は1月、がん標準治療の確立を

山梨県立中央病院
胃がん手術件数の推移(件)



胃がん標準治療の確立めざす 他施設との共同研究開始

るデータの積み上げに貢献していく。同院胃食道外科の池亀医師によると、胃がんに対する胃切除術でロボットの活用が

保険適用となったのは2018年4月。同院は保険適用と同時に導入した。進行した胃がんは従来、腹腔鏡による手術での対応が難

件)、腹腔鏡59%(23件)となり、開腹はわずか3%(1件)まで減少した。こうした実績が認められ、国立がん研究センター研究開

池亀医師は、保険適用前からロボット手術の臨床研究を推進してきた静岡県立静岡がんセンターに3年間勤務し、昨年4月に県立中央病院に戻ってきた。ロボット手術に以前は必須の条件だった日本内視鏡外科学会による技術認定医の取得を目指していて、山梨でロボット手術「デビュー」を視野に入れる。

しく、体への負担が大きい開腹手術を選択するケースが多かった。同院のデータをみても、ロボット導入前年度の17年度は62%に当たる50件を開腹で行っていた。「ロボットは術後の合併症が軽減される」(池亀医師)ことなどから、導入後は比較的、難易度が高いと想定される症例に対してロボットを選択。21年度はロボット38%(15

発費研究班を中心とする共同研究グループ「JCOG」に胃がん領域で参加することになった。同院は胃がん手術を行った患者のデータを提供。池亀医師は「手術のガイドラインの見直しを進める際には県立中央病院の治療実績も含めて検討されることになる。国内で有効性が確立されれば、ロボットの普及はさらに進むだろう」と意義を話す。

静岡がんセンター時代からがんゲノム医療の研究にも力を注いできた。研究内容は国際学会で発表するなど、最先端の治療をさらに前へ進めようという日々奮闘する。「山梨県のがん患者のために培った経験や技術を生かしたい」と意欲を口にする。II「ロボットと未来」シリーズは終了します。次回は23日に掲載します。